

COP30 「グローバル倫理ストックテイク」について

事務局

今年も、気候変動枠組条約第30回締約国会議(COP30)がブラジルで開催されました。開催に当たっては、「すでに話し合いの時期は過ぎ、いかに行動するかが問題だ」というような意見もあり、開催の成果を疑問視する見方もありました。

しかし、気候変動問題を科学の問題としてだけでなく、価値観・倫理観の問題としてもとらえ「文明の問題」として考えることが重要だと主張してきた環境文明21としては、今回、初めて「グローバル倫理ストックテイク」として、世界各国が協調して脱炭素に向けて動くには、これまでの議論に加えて、倫理・文化・連帯・責任といった価値観・倫理観に基づく議論の重要性が認識され、動き始めたことは歓迎すべきことです。

残念ながら、これに関する情報はまだ少ないのですが、事務局で収集した現時点での情報を以下でお伝えします。

11月10日から開催されたCOP30では、過去10年間に締結された気候変動に関する国際的な取り決めを実行に移す道筋をつけることが期待されていた。「実行」のCOPを標榜する開催国ブラジル政府は、ブラジル固有の「ムティラオン」(共通の課題に関係者全員で取り組むこと)の考え方をベースとして会合をリードした。そして、その象徴的な取組として「グローバル倫理ストックテイク(GES)」(別名「グローバル倫理バランス・ダイアログ」)を、ブラジル政府、国連、COP30議長国(COP30 Presidency)のイニシアチブで本年6月に立ち上げ、COP30の4つのリーダーシップサークルの一つに位置づけて、ブラジルのルラ大統領と国連のグテーレス事務総長が主導した。(4つのサークルとは、①過去のCOP開催国代表サークル、②財務大臣サークル、③GESサークル、④市民サークル)

パリ協定に基づく「グローバル・ストックテイク(GST)」が世界全体の目標達成に向けた進捗や課題を評価するのに対し、GESは、世界各国が協調してパリ協定の実施に向けて動くために何が必要かを、「倫理

(ethics)」「文化(culture)」「正義(justice)」「連帯(solidarity)」「責任(responsibility)」といった価値観を基にして考えようとするものだ。

気候変動問題に関してはデータや知見を基にした議論が続けられているが、各国の政治的意図や技術面での検討が続くばかりで交渉の進展が見られず、「なぜ合意が実行できないのか」、「誰が不利益を被っているのか」といった倫理的側面や公平性の観点が見過ごされがちでもある。しかし、ここ数年の平均気温上昇の状況などから見ても、議論ばかりで足踏みをしている場合ではなく、今や「実行」の段階に来ているのは誰もが認識するところだ。

そこで、倫理面から、また市民生活を踏まえた文化的な観点から、「ムティラオン」の精神で脱炭素に向けた動きを促進させようというのがGESの主旨である。

ではCOP30に向けてGEOはどのように行われたのだろうか。まず世界の6地域(北米、ラテンアメリカ・カリブ海地域、アフリカ、ヨーロッパ、アジア、オセアニア)において、アイデンティティ、地域、セクター、世界観の多様性を考慮して選出されたメン

バー（日本人は不参加）が、7月・9月に各地域で開催されたGES地域対話に参加した。COP30公式発表によれば、参加者は、宗教関係者、先住民代表、活動家、芸術家、科学者、若者、政策担当者など多岐に亘り、今我々が直面している様々な危機（気候、生態系、社会問題）について語り合い、公正で、誰一人取り残さない、持続可能な社会の実現に向けて今何をすべきかについて話し合った。同時に、市民社会、各国政府、地方自治体など草の根レベルでの自主的対話も奨励され、呼びかけを受けて世界中で多くの自主的対話を実施された。

これらの対話の結果は10月のプレCOPで報告され、各対話のビデオ録画は、交渉担当者への働きかけとなるべく、COP30会場のブルーゾーン（関係者のみが入場できるメイン会場）の特設パビリオンで公開された。

11月12日のパビリオンの除幕式で、COP30議長のアンドレ・コレア・ド・ラゴ氏は、気候変動対策の倫理的側面は技術的要素と切り離せない、と話し、ブラジル環境気候変動省のマリア・シルバ大臣は、GESは責任の共有を前提とする「連帯の作業」だ、と述べた。また北米共同対話の共同リーダーを務めたカレンナ・ゴア氏は、「今日、気候危機を引き起こしているものの多くは完全に合法であり、社会的に奨励さえされている。倫理は、私たちが物事をはっきりと見極め、前進する道筋を見出す助けとなる。」と発言した。

続く11月18日のハイレベル会合では、パネル討議「グローバル倫理的ストックテイク：気候変動対策のための倫理的ムティアオン（気候変動対策のための倫理的取組）」が行われ、各国政府、科学界、市民社会の代表が集まり、COP30に向けて実施されたGES地域対話及び自主的対話の成果を発表した。

これにはシルバ大臣及び各地域対話のリーダーも参加し、倫理的な側面から将来の気候変動に関する意思決定を導くための方法について議論した。シルバ大臣はここでも、GESのプロセスについて、「誰一人取り残すことなく、自然と共生した平和な社会を築けるよう公正で持続可能なモデルに安全に行き着くための地図になるだろう」と述べており、GESが地球規模の気候変動対策の「倫理的羅針盤」となることへの期待が表明された。

このハイレベル会合では、GES対話の成果として、“パリ協定の実施を加速させるために必要な倫理的、文化的で正義に基づく提案の概要”を示す「GESグローバルレポート」が出版されるとの発表があり、またGESを今後の国連気候変動枠組条約（UNFCCC）プロセスにおける常設のプラットフォームにするための道筋も話し合われた。

COP30では、GES地域対話及び自主的対話を通じて、これまでの国際的な議論に十分に反映されてこなかった先住民、若者、伝統的コミュニティ、女性などの視点が取り上げられ、「気候正義」の重要性があらためて認識されたと言えよう。そして新たに、「気候対策は技術や政策だけではなく、人々の生活、文化、価値観、社会正義を含むべきだ」とのメッセージが打ち出されたことは、COP30の一つの成果と考えられるのではないだろうか。

なお、11月21日に発表された「COP30行動計画」においては、GESについての直接の言及はないものの、GESが提起する倫理、正義、連帯、責任といった価値観は、行動計画の理念や議論の枠組みに反映されたと言えるだろう。

一方、日本は本件に対して政府もメディアも全く無関心の模様。それはやがて大きなツケとなるだろう。